

「えりもの春は、何もな春です」  
森進一のヒット曲で知られる北海道・襟裳岬に近い浦河町。ここに、「浦河べてるの家」はある。浦河日赤病院の精神科病棟を退院した人たちが、十二年前に十万円の手で昆布を買い付け、産地直送事業を始めた。それが、いまや年商一億円、百人を超す元入院患者が働く地元の「大企業」である。

地元にとけ込む精神病患者

歯をくいしばって、がんばったわけではない。合言葉は、「安心してサボれる会社作り」「利益のないところを大切に」「弱さを隠さず、弱さをきすなに」である。

「ベテル」は旧約聖書の「神の家」からとった。精神病の豊かな個性をむしろ持ち味に、浦河の町にとけこむ姿、そこに新潟や会津若松、名古屋の人々がほれ込んだ。費用を出し合い、映像記録「とても普通の人々・予告編」をつくった。すでに八巻になる。コピー自由とあって、手から手へと広が

り、全国各地で「べてるの風」を吹かせている。映像の主に会いたい、経営手法を学びたいと、人口二万六千人の町に年間千人以上がやってくる。

何が人々をひきつけるのか、それが知りたくて、浦河を訪ねた。仕事場では、二十人ほど

「べてる」の風

が、その日に働く時間帯を報告し合っていた。管理職はない。勤務時間は体調を考えて自分で決める。大きなテーブルを囲んで、たしパック、おつまみ昆布などの商品が作られてゆく。笑い声が絶えない。

昆布加工のほかに、紙おむつの配達、住宅改造、清掃、引越しの手伝い、ゴミ処理など、町の人が必要とするものを見つけては、

漁協や地元企業と協力して事業化してきた。訪問者の航空券やホテルの手配など、旅行代行業も手がける。

入院歴十六回という早坂さんと連れられて、町なかにある精神科病棟を訪ねた。体験者ならではの的確な助言ができる早坂さんたちは、病棟への出入りが自由だ。退院後の生活に不安をもつ入院者だけでなく、病院の職員からも頼りにされている。

十九歳で分裂病を発病したギタリストの下

や妄想と付き合えず身を投げつけたのだ。

「ここでは、批判はされても、最後は受け入れられ、迎えられる。その体験が安心の世界をつくるのでしょう」と、浦河日赤病院精神科部長の川村敏明さんはいち。

昔からこうだったわけではない。日高管内初の精神科ソーシャルワーカーとして、向谷地生良さんがこの病院に着任した一九七八年当時、入院患者は近所の店に納豆を買いにい

のけ者つくくらぬ文化を

野勉さんはいち。「発病直後に入った別の病院では、外出は禁止。六人部屋で娯楽はテレビだけ。一列にならんで口を開け、薬を口に

入れられ、合図とともに水で飲み込む。ほろっとして寝てばかりでした」

下野さんは、いま、浦河の町で恋人と暮らす。愛や妄想をテーマにした自作の曲を各地で演奏する。CD化の話も持ち上がっている。病気が完治したわけではない。仲間やソーシャルワーカー、医師たちの応援で、幻聴

いた。退院者が殺傷事件を起こし、住民の目は不信に満ちていた。

いまは、退院者たちが小中学校や高校に招かれて体験を話す。「分裂病という病気に誇りをもっていて、素晴らしいと思いました」と、ファンレターも舞い込む。

幻聴や妄想は、「変に思われるから他人に話してはいけないもの」「薬で消さねばならぬもの」というのが、多くの精神科医の見方である。だが、ここでは「幻聴さん」と呼ん

で体験をおおっぴらに話し合う。

地域の人たちと一緒に開く「心の集い」では「偏見・差別大歓迎集会」などを企画して率直に話してもらおう。年一回の「幻覚&妄想大会」は、いまや、町の名物だ。

二十一世紀を先取りする

日本の精神科病棟ベッドは諸外国に比べて異常に多い(グラフ左)。退院者の在院日数も長い(右)。何十年も入院している人たちのデータを加えると差はさらに開く。

その理由を精神科病院関係者は、「日本では家族が無理解で、回復しても引き取らない」「日本の社会は、精神病への偏見が強く、退院が難しい」などと説明してきた。

しかし、浦河では退院者が地元に戻りながら一緒に暮らしている。軽症だから可能なのではない。各地の精神科病院で「重症」と診断されていた人たちがもたない。ここでできることが、ほかでできないことはない。

「とても普通の人々」は九巻目の撮影に入った。今回も「予告編」の三文字がつく。「べてるの人たちの生き方こそ、二十一世紀への予告編だ」。映像を見た人たちの間から、そんな声が出たからという。

社説

経済協力開発機構 (OECD) のデータをみると、日本の精神医療が特異な歴史を歩んでいることがわかる。

諸外国は、医学の進歩につれて精神科病院を縮小し、予算を退院した人の町での暮らしを支えるために振り向けた。日本は私立の精神科病院を急速に増やす政策をとり、利益第一主義の病院経営者も参入した。彼らは患者を固定資産のように考え、退院に消極的だった。故武見太郎日本医師会会長は、そんな経営者を「牧畜業者」と表現した。

